

# 琉球大学学術リポジトリ

## 収容所の中の住民と生活の息吹

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2008-10-16 キーワード (Ja): 収容所, 戦災孤児, 「戦争マラリア」孤児, 青空教室, ガリ版刷教科書, 「ウルマ新報」, 三味線と踊り, 壺屋と泡盛 キーワード (En): 作成者: 川平, 成雄, Kabira, Nario メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002004131">https://doi.org/10.24564/0002004131</a>

## 収容所の中の住民と生活の息吹

川 平 成 雄

- 1 収容所の中の住民の精神状態
- 2 戦災孤児と「戦争マラリア」孤児
- 3 収容所の中の青空教室とガリ版刷教科書
- 4 「ウルマ新報」を発行させたことの意味
- 5 三味線と踊りの「力」
- 6 蘇る壺屋と泡盛

沖縄戦は、“鉄の嵐”と“血の嵐”が吹き荒れた、戦史上、類を見ない、戦争であった。戦場を彷徨い、壕の中から生きながらえて収容された住民は、明日への目標を失い虚脱と放心の中にいるものもおれば、飢餓線上の悲惨な避難生活から解放されて、明るい太陽の下で、自由に手足をのばせる喜びを実感するものもいた。

収容された人たちの中には、親を失い、兄弟姉妹を失い、親戚を失い、天涯孤独となった多くの孤児もいた。ひとり戦火の中を生き延びて収容されたものの、飢えと渇きによる栄養失調で幼い命を落とす孤児、親のぬくもりを求めて泣き続ける孤児、恐怖に震えて明るいところへ出てこようとしぬ孤児、彼らがいったい何をしたというのか。

沖縄戦の只中であっても、生き残った教師たちは子供たちの教育に正面から取り組む。これが青空教室であり、ガリ版刷教科書であった。子供たちにとって多くの仲間と一緒に歌い、学び、遊べるのは大きな喜びであった。子供たちの喜びは、教師たちにとっても喜びであった。

米軍政府は、収容所内で新聞を発行させるが、その意図するところは日本の敗戦が必至であることを報せると同時に、住民の身心を安定させ、収容所をスムーズに統括することにあつた。

戦争で打ちひしがれていた人たちを救ったのは、三味線と踊りの「力」であった。「砲弾の降ってこない南島の夜空に吸われていく三味の音」と踊りは、「枯れ枯れの大地に浸みとおる水のように、飢えた心の奥深くまで浸み込んでくる豊かなもの」であった。沖縄の三味線と踊りには、沖縄の人たちを絶望の淵から生き返らせる「力」が秘められているのである。

そして鉄と血の嵐が吹きまくった沖縄戦の終結後、人びとの復興への灯火となったのが、奇跡的に焼け残った壺屋の窯から立ち昇る煙であり、廃墟と化した首里から奇跡的に発見された黒麹菌による泡盛の製造所から立ち昇る煙であった。壺屋から立ちのぼる煙、首里から立ちのぼる煙は、復興に立ち向かう沖縄の人たちを勇気づける煙でもあった。

キーワード：収容所、戦災孤児、「戦争マラリア」孤児、青空教室、ガリ版刷教科書、「ウルマ新報」、三味線と踊り、壺屋と泡盛

## 1 収容所の中の住民の精神状態

1945年4月1日、米軍は沖縄本島中部西海岸の読谷山・北谷に上陸、同時に、住民、軍人・軍属をつぎつぎと収容する。収容所では憲兵隊から厳しい尋問を受けた。本籍、氏名、生年月日、官等級などがチェックされ、軍人・軍属は日本人部隊・沖縄人（琉球人とはいわなかった）部隊・朝鮮人部隊・将校部隊に区分されて屋嘉捕虜収容所へ送られ、沖縄出身の防衛隊や学徒隊も軍服をつけておれば屋嘉収容所送りになったが、沖縄人と申告すれば住民と同様に取り扱われた<sup>(1)</sup>。1945年3月1日、文学者の外間守善は沖縄初年兵として山形第32歩兵連隊に配属され、4月24日に800余人いた連隊であったが、9月3日まで生き延びたのはわずか29人のみであった。その中に9人の沖縄初年兵がいた。彼はこの時の状況をなまなましく語る。「私はそれまで『日本人』として国家のため、故郷のために戦ってきたので自分は『日本人』であると信じて疑わなかった。そこで『日本人』だと答えると、先に収容されていた友人たちが有刺鉄線の囲いの内側から「守善！ 沖縄人と言え！」と口々に叫ぶ。これは何かあるのだろうと思い、『沖縄人』と申告しなおした<sup>(2)</sup>。

収容された住民は、沖縄戦が激しさを増すにつれて増大し、45年4月30日＝12万4395人、5月31日＝14万9550人、6月30日＝28万4625人にのぼった<sup>(3)</sup>。米軍は、日本軍との戦闘、住民の収容、軍人・軍属の捕虜と三重の行為を同時に遂行しなければならなかった。

1945年7月2日、米軍は沖縄戦の終結を宣言するが、この時点における住民の状況を「琉球列島の政治・社会・経済に関する陸軍長官への報告書」は、つぎのように伝える<sup>(4)</sup>。

沖縄住民の戦争による被害と混乱は徹底したものだ。少なくとも全人口の75%が何ヵ月もの間、自分の出身地を捨てて暮らさねばならなかった。出身地にいた人たちはほんのわずかであった。

住居や建物という建物の90%が破壊され、かろうじて全壊を免れた建物もその損壊はひどかった。農民は自分の土地で農耕に従事することもかなわず、耕しているところはといえば他人の土地だった。控え目に見ても全戸数の90%が家具や調度品を破壊された。住民は砲爆撃下、持てるだけの家財道具や消耗品を肩にかつぎ、あるいは頭にのせて逃げまどうのみだった。その間に家具類は一切が灰じんに帰したのである。失った品物のなかには食料品や日用雑貨類も含まれていた。

政治も政府機関も存在せず、社会生活らしきものはあってもなきがごとく、わずかに緊急食料を配給するときだけみられるようなものであった。

このような混迷状態は全島至るところで見られ、しかも何ヵ月も続いたのである。

戦場を彷徨し、親を失い、夫や妻を失い、子を失い、兄弟姉妹を失い、壕から追い出され、生きながらえて収容された住民は、どのような精神状態にあったであろうか。このことを少しでも知ることなしには、収容された住民の生活の意味がわからない。

林博史は、こう問題提起する。「沖縄戦の戦場での体験とともに重要なのは、収容所での体験だった。沖縄の社会は、字（かつての村）ごとに言葉の語彙やアクセントも違い、話す言葉で字の違いがわかったというほどそれぞれが閉鎖された社会だった。……その閉鎖性が一気に崩れるのが沖縄戦のなかだった。沖縄のなかで人々の大移動がおきた。さらに米軍の収容所には各地の人々が混ざって収容された。故郷が米軍に接收されて、別の場所に新たに生活の基盤を作らざるを得なくなった人々もたくさん生まれた。そのなかからようやく共通の

言葉、共通の意識が生まれたのである」<sup>(5)</sup>と。林がいう「沖縄戦の戦場での体験とともに重要なのは、収容所での体験だった」とする問題提起は、ある程度評価するにしても、他は皮相的な指摘にすぎない。なぜなら、住民が同じ地区に収容されたからといって「共通の言葉、共通の意識が生まれた」ことにはならないからである。とくに「言葉」は長い年月をかけて生まれてきたものであり、短時間で生まれることはない。また上に引用した文言に続いて、「後の1950年代に米軍基地に対する島ぐるみの反対運動を起こしうる基盤が、このなかから作られていくのである」<sup>(6)</sup>と、断じるにいたっては、まったく異なる次元の問題を単線的に結んで展開しているにすぎず、論外である。

ここでは、証言などの資料を読み解くことによって、収容された住民の精神状態に迫ることにしたい。とにかく住民は、極端なまでの栄養失調で収容された。加えて敗戦による傷心は、彼らを魂の抜けた虚ろな人間にした。一切を失った心の痛手はあまりにも深刻であった。昼も夜も心を支配していたのは、虚脱と放心であり、現実をみつめ、将来をおもうとき、あるのは無明と絶望のみであった<sup>(7)</sup>。敗戦の住民にとっては、理性も情愛も道義心も何もかも失った。戦争は、人間の内面までも徹底的に粉碎し、残したものは虚ろの人間でしかなかった<sup>(8)</sup>。ある老婆は、トラックが収容所に着くたびに、「ンジ、イッターヤ、チュウル、シマジリヌ ボウクウゴウ カラ ンジティチャンリヤー（あなた方はきょう島尻の防空壕から出て来たそうだね）「アンシ ヤーニンジュ ーナ ゲンキン タマヌナカ フシヂ チュールムン イッターヤ イッパー トックワムチヤテーサ（そして家族全部元気で弾丸の中を生きて来たんだからあなた達は大へん徳があったんだね）」「アンシ エー ワッターヤ アラカチ ンリイーシガ ワッター ンマガーグワター ンランティ（そして私は新垣というが、私の孫達を見なかったかね）」、と老いの目をショボショボさせ、目には涙を一杯浮かべて孫たちを放心したままで探し回るのである<sup>(9)</sup>。

つぎのように実感する住民もいた。収容され、日がな一日戦禍で荒廃した田畑の開拓に没頭するようになったが、沖縄本島北部山中での避難の緊張と過労、そして飢餓線上を彷徨してきた悲惨な生活から解放され、明るい太陽の下で自由に手足を動かして生きる喜びを再びしみじみと味わい得た。衣料の無償配給があり、新・中古品とりどりに野戦靴、靴下、ズボン、シャツ、上着、毛布、布団などが公平に行きわたった。また食糧が無償で給せられ、米、バター、チーズ、各種の魚肉、獣肉、野菜、果物の缶詰から菓子類にいたるまで、見たこともない食糧は干天に慈雨の如く只々生き抜いて来た喜びをさらにしたのであった。米軍政府の配給によって、誰でも同じ洋服を着、同じ靴を履き、同じ茅葺かテント張りの家に住み、同じ食糧を食べて、上も下もない平等の世の中になって有難かった。日中戦争以来、困苦・欠乏に耐えて来た住民にとって、収容所の生活はさして苦痛ではなかった。食糧、衣服、その他の支給物資は公平に配給され、日課といえ、16～60歳以下の健康な男女は農耕、建築、衛生などの作業を米軍要員の指導監督の下にやればよいだけであった<sup>(10)</sup>。住民の表情は明るく、活気がみなぎっている。声も弾んでいる。「生氣ある情景」であった<sup>(11)</sup>。

収容された住民の精神状態には、二重の構造が生まれていたのである。これが人間である。

## 2 戦災孤児と「戦争マラリア」孤児

沖縄戦は、多くの戦災孤児を生んだ。沖縄戦中、そして沖縄戦終結後、戦災孤児がどれほ

どいたかはわからない。

1953年7月、琉球政府文教局研究調査課は、宮古群島と八重山群島を除く、沖縄本島および周辺離島における戦災孤児の実態調査をおこなっている。「沖縄には戦後“戦災孤児”の語が生れ“靖国の子”の美名はこの中に影をひそめてしまった。戦災孤児の多くは親類縁者に引取られ、或は厚生園などの社会施設に收容されてすすく伸びているが反面、路頭に迷い転落の一途をたどっている者もあり憂慮されている」<sup>(12)</sup>、との世論を受けての実施であった。53年11月時点において、両親を失った児童・生徒は4050人、母親を失ったものは2850人、父親を失ったものは2万3800人にのぼった。「戦争がどれだけの男を、父を殺したか」<sup>(13)</sup>、を端的に語る数値である。この調査が児童・生徒を中心になされたものであることを考慮に入れるなら、おそらく沖縄戦終結後は、もっと多くの戦災孤児がいたであろう。ここでは、收容された戦災孤児がどのような状態におかれていたかをみることにしたい。

米軍は、沖縄本島上陸後、住民避難地区に孤児院をつくり、親を失い、親からはぐれた子供たちを收容した。收容地の中心が、沖縄本島北部宜野座村の古知屋であった。收容されたものの、2か月間も飲まず食わずで戦場を逃げまわっていたために、孤児の多くが、栄養失調で幼い命を閉じるのであった。このときの状況を1912（明治45）年生まれの仲間幸徳は、生々しく語る<sup>(14)</sup>。

古知屋には、中頭（沖縄本島中部一筆者注）や島尻（沖縄本島南部一筆者注）から毎日のように栄養失調の乳児や子供、年よりが運ばれて来ました。……彼らは運ばれて来た時から栄養失調で、目ばかりぎらぎらして、死にかけている人たちばかりでした。それで、運ばれて来てから、二、三日したらほとんどが死んでいったのです。年よりもいしましたが、一、二歳の乳児や四、五歳の子供も多かったです。戦争孤児たちで、戦争で親とはぐれたり、親をなくしたりして身寄りのない子供たちがほとんどでした。病気とか、けがをしたとかではなく、ほとんど栄養失調の子供たちで、ヤーサ死（餓死）で非常にかわいそうでした。墓地は開墾に二か所ありました。戦後、ほとんど遺骨を掘り出してあります。

米軍によって子供たちの面倒をみる保母、炊事係、院長が選ばれた。元慰安婦に育てられた孤児たちもおり、「日本語は分からないが、子どもたちの洗濯や世話をしてくれた。美人でとても優しくかった」<sup>(15)</sup>、という。かやぶき小屋の建物が作られ孤児たちが集められた。だが、子供たちの様子は悲惨だった。沖縄本島北部には、中部・南部から避難民がひしめきあい、食糧が不足、子供たちは、栄養失調とシラミだらけで衰弱しきっていた。炊事の女性が止血や傷に効くというヨモギを摘んで沸騰させた湯でさっとゆで、子供たちの身体を懸命にふいた。親を失い、衰弱していた子供たちを救おうと必死だった。保護されたものの、戦禍によるけが、栄養失調、病死など、「鉄の暴風」が去っても、身も心も傷ついていた子供たちに余波は容赦なく吹き続けた。食事はミルクしかなく、あとで「おかゆ」も出るようになる。着る物もなく、お腹が冷えないようにタオルを巻いても下痢する子供は跡を絶たず、部屋は豚小屋のようになって衰弱は増すばかりであった。幼児につきっきりの保母が心配しながらも疲れ果てて寝入り、朝起きてみると、泣き声も上げずに亡くなっている子供もいた。子供たちの遺体は、「衛生係」と呼ばれた男性が担架で近くの墓地に埋葬したが、雨が降ると埋葬に行けないので、孤児院の軒下に小さな遺体を並べた。悲惨な沖縄戦を生き抜いたのに、幼子の多くの命が孤児院で散っていった。目を離すといなくなり、垣根の中やカマドの

煙突の隙間、また床下に何日も隠れ、いつも何かにおびえるように、ぶるぶると震えていた子供もいた。子供たちの心は、戦争の恐怖、親を失った悲しみに打ちひしがれ、一人では抱えきれないほどの悲哀に満ちていたのである。童話を読む時は、「お父さん」・「お母さん」という言葉は禁句だった。その言葉を聞くと、子供たちが泣き出すのである。言葉を教えなれない年令なのに、この言葉を飛ばすのである。子供たちの中には、巡り合った親や親戚に、あるいは養子となって引き取られていくのもいたが、養子になるのを嫌がって、面会の時に、逃げ回るのもいたという。幼くて自分が誰かもわからない戦災孤児、戦争が終わっても、子供たちの心に刻み込まれた戦争の傷は、決して癒えることはない<sup>(16)</sup>。

コザの孤児院で、保母を務めた元梯梧学徒の稲福マサは、当時の子供たちの様子と自らの気持ちをつぎのように語る<sup>(17)</sup>。

……幼児達は栄養失調で痩せ細り、お腹が膨れほとんどの子は下痢で顔色も悪く、柵で囲まれた中には十名の子が寝かされ、一人の子が汚すと柵の中の子ども達は頭から足の先まで体中汚物で塗られ、そのまま冷たくなっている子や、泣きじゃくっている子を見て激戦の中から紙一重で生き残った子ども達は親の懐のぬくもりを知らず気の毒で胸が痛んだ。

十月に入り、……生還を待っている家族のもとへ帰る決心をした。帰る朝、子ども達に帰ることを話すとわんぱくでいじめっこ達が寄ってきて帰しないと纏りついて離れない。七時集合の時間を気にしながら「家族に会ってすぐに来るから待っていてねー」と説得し、やっと離してくれた。纏りつき泣く子ども達。朝早く出たので代表として女の子二人で大きなおにぎりとおかずがなかったからお塩を持って来ました。お腹が空いたら食べて下さい」と出発際に持ってきてくれた。なんと優しい子達でしょう。「親はなくとも子は育つ」その好意に愛情と感謝を込めて「ありがとう」の一言で涙があふれ、胸がいっぱいになった。小高い丘には五年生の子ども達が手を振って見送っている。（十月十六日と覚えている）家族や郷里の人達との再会は、生きてよかったと感無量。過酷な戦争は夢のような気がした。

学徒隊へ参加する時、卒業証書を貰ったらすぐ帰ると約束の口実を使い家を出て行っただけに親の監視から逃れることができず、子ども達との約束を破ったことに詫びたい気持ちが未だに胸に残っている。孤児院で過ごしたことは一生忘れることはないと思う。

孤児たちは、どのような収容所生活を送っていたのであろうか。ここで、いくつかの証言を聞いてみることにしたい。

#### 証言 1：大湾近常 当時 6 歳 読谷村渡具知出身

六月になっていたであろう。孤児院には多くの子供たちが収容されていた。男の子、女の子、皆戦争の中を奇跡的に生き残ってきた子供たちだ、親を亡くし、又、親とはぐれた子供たちだ。小学三年、四年でもなれば子供達の世話をみる兄貴や姉であった。

孤児院では、三度の食事をはら一杯食えることができた。僕にも友達ができていくようになった。小学生は広場に集められて勉強が始められていた。青空学校、木の下での学校である。体操をしたり、唱歌を歌ったり元気な子供達になっていった。お父、お母、兄、妹を亡くした僕も心の傷が癒えて子供達の仲間にとけこみ、元気な声をだすようになっていった。保母さんが子供達の世話を面倒を見てくれるし、居心地のよ

い生活を送ることができた。日が経つにつれて、多くいた子供達が親戚や、家族が来て引きとられて孤児院から去って行く。秋が過ぎて冬も越し、一九四六年の二月頃になっていた。残り少なくなった孤児の中に僕は居た<sup>(18)</sup>。

### 証言 2：伊佐順子 当時14歳 中城村仲順出身

八名家族のうち、沖縄戦を生き延び、米兵に助け出されたのは順子、八歳の妹洋子、十カ月の弟邦雄の三名だけとなった。順子は久志の野戦病院へ収容され、その後、宜野座村福山にあった収容所へ連れていかれた。洋子と邦雄は、越來村嘉間良の孤児院に送られた。そこで、乳飲み子は別の部屋に分けられたため、二人は別の部屋に入れられた。洋子によると、二日後に乳飲み子部屋を身に行くと、弟の姿はなかったという。六十年たった今でも、邦雄の生死は分からない。「弟は、骨と皮になり、泣くこともできなかった。生き永らえることができなかったのでは」。弟への思いを断ち切るために順子はそう考えてきた<sup>(19)</sup>。

### 証言 3：鶴田好子 大正15年生まれ 糸満市与座出身

姉の家族は7人から甥と姪の2人だけが生き残り、残された2人の子は戦災孤児となった。甥の孝治が石川で暮らしているのを聞いて、(大前)の牛栄さんに頼んで連れてきてもらった。孝治と姪の直子は祖母と3人で山原に疎開したが、祖母が亡くなり、直子は孤児院に送られていた。

間もなく私たちは兼城に移動することになった。兼城から賀数に移ってから直子の消息を尋ねて、方々の孤児院に手紙を出した。宜野座の福山の孤児院に直子がいることがわかった。孤児院から直子を賀数に引き取ることになり、兼城の役所まで連れてきてもらった。

甥と姪は自分の誕生日を覚えていなかった。当時の子どもは誕生祝いは、生まれて7日目のマンサン祝いと1年目のタンカーユーエーだけで、正月が来る度に年が一つずつ増えると教えられていたので、自分の誕生日がわかるはずはなかった。仕方がないので、孝治は男の子の節句の5月5日、直子は福山から引き取った6月13日を記念して誕生日とした。考えてみれば不思議なもので、直子を引き取った日は1年前に賀数から撤退した日と同じ日だった<sup>(20)</sup>。

「鉄の暴風」が吹き荒れた沖縄戦の中を、飢えと渇きに耐えて奇跡的に生き抜いた戦災孤児たちであった。だが、収容されてもこれまでの栄養失調がたたって幼い命を散らす孤児、なれないミルクのため下痢がひどくなり死に至る孤児、親の懐の温もりを求める孤児、生まれた日さえ知らない孤児。沖縄戦は、多くの戦災孤児を生んだ戦争でもあった。

孤児院は、1945年には、沖縄本島北部に田井等・瀬嵩・福山・漢那の4箇所、中部にコザ・石川・前原の3箇所、南部には首里・糸満・百名の3箇所の計10箇所あったが、47年には沖縄民政府によって田井等・福山・コザ・百名の4箇所に統合され、さらに翌48年には那覇市首里石嶺町のチャイナホーゼ（国府軍キャンプ）跡地に建てられた沖縄厚生園の1箇所に整理された<sup>(21)</sup>。また53年9月には、沖縄で唯一の民間養護施設の「愛隣園」が与那原町与那原に開園する。アメリカバージニア州のリッチモンドに本部を置く「キリスト教児童福祉会」が、沖縄戦によって多くの戦災孤児を生んだ沖縄に、孤児救済のための施設の設置を考えたのが開園のきっかけであった<sup>(22)</sup>。

初代園長には比嘉メリーが任命された。愛隣園について、一期生の知名武三郎は、こう振

り返る<sup>(23)</sup>。

当時の沖縄社会には、愛隣園にたいする偏見があったという。「学校でいじめとか盗みがあったら、園の子が最初に疑われ、白い目で見られた。孤児イコール不良というのが悔しかった」。すさみかけた気持ちに光を照らしたのが、園長であった。悩んだ子どもたちがいると、自宅にまで招きいれて、話を聞いてくれる、母親のような存在だった。武三郎は、苦しかった時に、よく思い出す言葉がある。園長が、白のハンカチを取り出し、汚れてしまっても、それは白いハンカチであると話した。「皆さんも、恐れず、いろいろ経験することが大切です」。親を失った子どもたちが小さくならず、勇気を持つよう、励ました言葉を大切にしている。

戦災孤児の肉親捜しが公に始まったのは、皮肉にも、昭和天皇「終戦の詔書」がラジオから流れた1945年8月15日発行の『ウルマ新報』（創刊号は1945年7月26日）第四号においてであった<sup>(24)</sup>。見出しは、「本部より皆様へお知らせ」、である。戦災孤児を引き取り親身となって世話をしてくれる家庭を捜している「お知らせ」である。

厚生部（救済部）の方では孤児の親類を探し当たる為に、随分努力してはありますが、差し当り、こ口やうな孤児の親類を見つけ出す口とが出来ない場合当局としましては、縦来通り孤児院で世話して貰ふよりも子供の順調なる發育のために最も必要な温い親心と家庭的楽しみや躰等の諸点を考へたとき親切な或家庭に世話して貰ふ方が良策であると望んでゐます。それにしても当局の刺畫が万支障無く遂行されます上には是非とも皆様の直接間接の御協力口緊要です。

第二次大戦敗戦直前の1945年、八重山の住民は日本軍の命令によりマラリアを媒介するアノフェレス蚊の主な発生源である山中やマラリア有病地への避難を強制された。2か月から5か月にわたる避難生活で、マラリアの特効薬であるキニーネの不足、食糧不足によって多

表1 八重山における沖縄戦・戦死者

単位：人

	男	女	計
石垣島	58	55	113
竹富島	2	0	2
小浜島	1	0	1
黒島	6	4	10
新城島	0	0	0
波照間島	0	0	0
鳩間島	2	0	2
西表島	8	4	12
与那国島	28	10	38
計	105	73	178

出所：吉野高善・黒島直規「一九四五年戦争に於ける八重山群島のマラリアに就いて」（『石垣市史 資料編近代3 マラリア資料集成』石垣市役所、1989年、所収）722頁より作成

くの住民が犠牲となった。沖縄戦による戦死者は、「表1 八重山における沖縄戦・戦死者」にみるように、178名であったが、マラリアにより死亡した住民は、「表2 八重山郡におけるマラリア罹患患者および死亡者（1945年1月～12月）」にみるとおり、罹患患者数1万6884人の21.6パーセントにあたる3647人にもものぼった。第二次大戦前の1928年から42年までの八重山郡におけるマラリア死亡者は各年9～51人で、罹患患者にたいする死亡率は0.94～3.1パーセントであった<sup>(25)</sup>。だが、この爆発的な発生は、これまでのとは異なっており、戦争がもたらしたのであり、「戦争マラリア」ともいうべきものであった。

両親がマラリアに罹患して死亡し、「戦争マラリア」孤児になったのは、沖縄本島や周辺離島、宮古群島ではほとんど見られず、八重山群島で多く見られ、実態調査もなされている。

表2 八重山郡におけるマラリア罹患患者および死亡者（1945年1月～12月）  
単位：人・%

		島名 / 集落	罹患者	死亡者	死亡率%	
石垣町		登野城	1,760	633	36.0	
		大川	891	226	25.4	
		石垣	1,017	149	14.7	
		新川	1,390	373	26.8	
		川平	72	7	9.7	
	小計			<b>5,130</b>	<b>1,388</b>	<b>27.1</b>
	大浜村		平得	613	264	43.1
			真栄里	239	88	36.8
			大浜	1,805	479	26.5
			宮良	901	107	11.9
			白保	1,184	169	14.3
			開南	27	0	0.0
			川原	44	0	0.0
			川辺	45	1	2.2
伊原門			57	0	0.0	
平久保			15	0	0.0	
小計			<b>4,930</b>	<b>1,108</b>	<b>22.5</b>	
竹富村		竹富島	77	7	9.1	
		黒島	862	124	14.4	
		小浜島	128	19	14.8	
		新城島	144	24	16.7	
		波照間島	1,587	477	30.1	
		鳩間島	526	59	11.2	
		西表島	古見	23	5	21.7
	南風見		164	21	12.8	
	西表		98	6	6.1	
	白浜		25	25	100.0	
	丸三		19	18	94.7	
	小計			<b>3,653</b>	<b>785</b>	<b>21.5</b>
	与那国村	与那国島	祖納	1,757	203	11.6
比川			473	13	2.7	
久部良			941	150	15.9	
小計			<b>3,171</b>	<b>366</b>	<b>11.5</b>	
合計			<b>16,884</b>	<b>3,647</b>	<b>21.6</b>	

出所：表1に同じ、718頁より作成。

孤児は、「表3 『戦争マラリア』孤児」にみるように、石垣町=109人、大浜村=51人、竹富村=38人で、集落別では登野城が最も多かった。孤児の中には、縁故者に引き取られる者もいたが、石垣町の30人は頼る者も無く、扶養してくれる者も無く、住む家も無く、子犬のように町内を徘徊して食を探し求めるのであった。孤児たちの生活の状況を、吉野高善・黒島直規は「一九四五年戦争に於ける八重山群島のマラリアに就いて」の中で、つぎのように描写する<sup>(26)</sup>。

……登野城に於ける孤児、嘉○某（当九歳）は爆弾で半潰した空家の土間に寝てゐた。頭髪は脱落し、顔色は蒼白で、著しく羸瘦して、マラリアの為め発熱してゐた。枕元には十一歳の姉が何処からか探して来たと見えて、芭蕉の葉に魚の煮付と二、三

表3 「戦争マラリア」孤児

単位：人

島名 / 集落		男	女	計
石垣町	登野城	26	17	43
	大川	12	8	20
	石垣	6	11	17
	新川	16	12	28
	川平	0	1	1
小計		60	49	109
大浜村	平得	10	11	21
	真栄里	1	4	5
	大浜	5	6	11
	宮良	2	7	9
	白保	4	1	5
小計		22	29	51
竹富村	竹富島	2	5	7
	小浜島	4	5	9
	波照間島	4	8	12
	鳩間島	1	3	4
	西表島	4	2	6
	小計	15	23	38
与那国島		0	0	0
合計		97	101	198

出所：表1に同じ、729頁より作成。

といとなる老人・子供たちをマラリアの有病地へと強制的に追い立て、生まれたのが「戦争マラリア」孤児であった。

### 3 収容所の中の青空教室とガリ版刷教科書

1945年4月1日、米軍は沖縄本島中部西海岸に上陸するが、その1か月後の5月7日には、早くも石川収容所地区に石川学園（現在の城前小学校の前身—筆者注）を設立している。「戦後」の学校の開設第1号である。45年5月22日、日本帝国政府が「戦時教育令」を発し、「学徒ハ尽忠以テ国運ヲ双肩ニ担ヒ戦時ニ緊切ナル要務ニ挺身シ平素鍛錬セル教育ノ成果ヲ遺憾ナク発揮スルト共ニ智能ノ練磨ニカムルヲ以テ本文トスベシ」として授業閉鎖に追い込まれていたころ、沖縄ではすでに「戦後」の教育がはじまったのであった。どうして、米軍政府は、沖縄戦の最中にもかかわらず、子供たちを集め学校を開いたのであろうか。このことについて、『琉球列島の政治・社会・経済に関する陸軍長官への報告書』は、つぎのように記している。「沖縄戦が始まると、焼け残った校舎は直ちに米軍に使用されたが、作戦遂行中でも、ある程度の学校教育は続行することが許された。それはレクリエーション的なものを主体とするという制限付きのものではあったが、そのねらいは子供達の心をそこに集中させることによって徘徊をコントロールしようということもあった」<sup>(27)</sup>。またアメリカの歴史学者アーノルド・G・フィッシュ二世は、もう少し詳しく指摘する。「教育の復活は、子どもが群がって生活していたキャンプで始まった。というのは、野放図に子どもを放っておくのは邪魔になるだけではなく、地域によっては大きな問題でもあったからである。上からの指示による何らかの教育が秩序を確立するための最もいい方法だった。子どもが道端で遊ばないように

個の芋があった。又比嘉某（当十六歳）外数名は登野城船浦お嶽の庭に集つて、罐詰の空罐に芋を煮てゐたが、其の隣にゐた十歳の孤児と十三歳の孤児はつかみ合つて喧嘩をしてゐた。之れは十歳の孤児が探して来た罐詰を十三歳の孤児が盗んだのが原因であつた。是等の孤児は一人も完全な衣服を着けた者が無く、上衣のみ着けた者もあれば、半ズボンのみ着けた者もあり、夜具を持つてゐるやうな者は一人も無かつた。食糧は勿論民家から盗んでゐたのであるが、孤児各人が単独に盗んだのは少なく数名隊を組んで計画的に盗んだのが多かつた。又盗んだ物は食糧のみで無く、他の物資もあり、而も盗んだこの物資で食糧、例へば塩、醤油、味噌、魚等を交換してゐた。

日本軍は、戦争遂行のために足手ま

するため石川のBチーム（住民集結キャンプの管理—筆者注）の司令官は、早くも1945年5月から運動場をつくるのを許可した。そのため150人のアメリカ人と沖縄人を選んだ。3日後に運動場が完成したとき、4歳から8歳までの1000人の子どもがそれを使用した。このささやかな始まりに次いで軍政本部は地区司令官に対し、小学生用の娯楽施設をつくるよう指示した。この娯楽施設で授業を行う。授業では読み書き、計算、図工、団体遊戯などを重視する<sup>(28)</sup>。

確かに、米軍政府にとって、戦争を遂行するうえで、子供たちが戦場を「徘徊」することは作戦的にみても障害であったにちがいない。だが、沖縄戦を生き延びた教師たちが学校を再建し、子供たちの教育を再開しなければならない、という熱い思いがあったことも見逃してはならない。

設立当初の石川学園の状況を見ることにしたい<sup>(29)</sup>。45年4月25日、創設者であった山内繁茂は、家族ぐるみで石川に收容され、「職業—教師」として難民登録をした。石川に次々と收容されてくる住民、とくに多くの孤児を含む5～6歳の子供たちは、習いたての「ギブミー」を連発し、米兵にたかる。また南北に疾走するトラックから米兵が投げる食べ物・タバコに群がる。時には、海岸に集積された食糧を盗み威嚇射撃を受ける子供、生まれて始めてみる黒人に「土人々々」と罵声をあびせて水をぶっかけ胸元に銃剣をつきつけられる子供、制限時間外の夕方に道路に出て米兵に拉致された7歳の女の子、もいた。その頃、山内のもとに、海軍将校が訪ねてくる。「子供たちがあれでは、米軍の作戦に支障をきたして困る、教師であったというあなたで何とかしてほしい」という。山内は、こう決意した。「今、日米両軍は戦っている。その勝敗はわからぬ。しかしそれがどうであれ、自分たちの子供は自分たちで守る外はないではないか」。この山内の決断が、石川学園の第一歩となった。皇軍が奮戦している時、敵の学校に子供をやれるかと反対する住民もいたが、一番喜んだのは、子供たちであった。米軍による3月23日からの大空襲、艦砲射撃、上陸と沖縄戦が激烈さを増す中で、明かりを恐れ、声を押し殺され、恐怖の戦場をさまよっていた子供たちにとって、太陽の下で仲間たちと一緒に遊べるのは、大きな喜びであった。米軍から、まずは幼児を集めろとの命令であったが、それは無理なので、4年生以下を集め、クラス分けした。木陰を求めて場所を移動しながら、知っている限りの歌を歌わせ、知っている限りの話を聞かせ、遊戯をさせ、地面をならして字を書かせる。時には、潮の引いた砂浜で字を練習させる。鉛筆一本・紙一枚のない中で子供たちをまとめ、何とか工夫して教える。ある元教師は語る。「アメリカ軍からはたゞ、子供たちを管理しろということだったので、集まった子供たちを見ていると、何とかしなくちゃという気になったのですよ。やっぱり教師根性というものだったのでしょうね」と。ここに、戦火の中であっても、子供たちの行く末を案ずる教師の姿があった。

『石川学園日誌』（琉球大学附属図書館所蔵）をみると、5月10日木曜日晴天、今日の行事として、全児童に対し、朝礼後、校内外の清掃をして開園式を挙るとあり、式次第は、1 一同敬礼、2 黙祷、3 軍隊長挨拶、4 園長挨拶、5 ラジオ体操、6 一二年唱遊、7 三四年競技、8 解散、とある。石川学園の開園を皮切りに、6月から8月にかけて各地の收容所において、学校の発足がみられるようになる。だが、「校舎ナシ、教科書、学用品、腰掛、机等学校設備ト見ラルルモノ一切モナシ」<sup>(30)</sup>、というのが現実の姿だったのである。だが、このような状況の中でも、子供たちは、自分たちの周りにあるすべてを学習用品として楽しんだのであった<sup>(31)</sup>。子供たちの想像力の豊かさには、驚かされる

- (1)体育あそび：小高い丘へのぼったり、すべったり、横になってころがったり、頭を下にしてはらばいになってすべるなど。
- (2)水あそび：川の水の中に顔を沈めて誰が長く続くか競争したり、水かけっこ。
- (3)手あそび：ガジュマルの葉を二つ折りにして唇にあてハーモニカの代わりの草笛に、ガジュマルの葉をつなぎあわせて帽子に。
- (4)お絵かき：木の枝で地面に自由に絵を描いて相手に説明したり、空き缶に水を入れ、指をぬらして地面に一滴ずつたらして水絵にしたり、草花を摘んで色水を作って絵の具やクレヨンの代わりにしたり。
- (5)数あそび：松ぼっくりを拾ってきて数の練習、石ころを並べて足し算、引き算の練習。
- (6)楽器あそび：空き缶を棒切れで叩いて強弱や拍子うちの練習、口オルガンで高い音、低い音の歌唱の練習。

はじめの教科書は、ガリ版刷であった。ガリ版刷教科書の編纂経緯について、“ひめゆり部隊”を引率、教え子の戦死、自決を目の当たりにして苦悶の中にいた仲宗根政善の語りを中心にみる。仲宗根は、牛島満司令官が自決した1945年6月23日に米軍の捕虜となって、沖縄本島北部の宜野座村松田にあった古知屋の収容所に移動させられる。そこにいる時、米軍政府の教育係将校ハンナ大尉が山城篤男（県立二中校長、現在的那覇高校一筆者注）を迎えに来て、当時最大の収容所があった石川に連れていかれた。その後、「山城さんから『君も石川に來い、教科書の編修をしたいから』と言われたんです。しかし、ぼくは負傷してもいたし、とても再び教育にたずさわる気にはなれませんでした。南風原陸軍病院撤退のとき重傷患者といっしょに壕に残して來た生徒が、米兵に救助されて宜野座の病院に連れて來られて、オフ・リミッツ（禁止区域）をくぐりぬけて見舞って來た直後でしたから……。ただ妻子がどこにいるのか、まだわからなかったものですから、ひょっとしたら石川へ行けば、妻子の消息はわかるかもしれないと思って、石川の山城さんのテント小屋に行っただけです」<sup>(32)</sup>。

教科書の編修に意欲が湧かなかった仲宗根であったが、目の前に“ある光景”が飛び込んできた。この光景こそが仲宗根に教科書編修への参加を決意させた。

……石川の街頭をうろついている学童を見ると、スパスパ、タバコをすっているんです。レーション（米軍の野戦食）の中に入っているやつをすっているんですね。人々の服装も男か女かほとんど見分けもつかない。アメリカさんの洋服をつけたり、つぎはぎのよれよれの服をまとって、夢遊病者のようにうろつきまわっている。はだしの者も多い。

いちばんショックだったのは、チリ捨場にたかっている学童の群れを見たときでした。古川という二世が国頭へ行くと聞いたもんだから、この機会を逸してはいけないと思って一妻子は国頭においてあるもんだから一、必死になってお願いして乗せてもらったんです。石川を発って恩納の谷茶をすぎて、やがて恩納に近づいたところを、丘の上に、大きなチリ捨場がありましてね、そこを通ったとき、袋をかついだ少年がいっぱい群らがおるんです。大人は柵外に出るのを絶対許されなかったんですが、子供は大目に見られていました。いわゆる“戦果”探しに恩納の方まで石川からずっと遠出していたわけです。そういう少年たちが無数に、チリ捨場に群らがおるんですよ。つぎつぎとトラックがチリを満載して運んで來て、放り捨てる、そのもうも

うとけぶる黒煙の中に、袋をかついだ無数の小さな乞食の群れがたかかって行くのです。“戦果”をあさっているんですね。みんなわれわれの国民学校の学童たちです。それを見たとき、これは放っておけないなあと思いました。名護へ行ってもそういう状態でした。あちらこちらに子供らの群れがうろついていました。

そういう状態だったもんですから、何とかして、みんなで早く教科書を作って教育を始めなけりゃいかなあという気になったんです。東恩納部落のいちばんはしっこに焼け残った民家があって、それが教科書の編集所だったんです。そこで、山城先生のもとで教科書編集を始めたわけです<sup>(33)</sup>。

米軍政府から示された教科書編集の基本方針は、(1) 日本的教科書の絶対禁止、(2) 軍国主義的教材の禁止、(3) 超国家主義的教材の禁止、であった<sup>(34)</sup>。仲宗根は、こう語る。「教科書編集ですが、沖縄を主体とする教科書の編修方針で、県民はすべて敗戦によって茫然自失していたときのことでしたので、新沖縄建設の意気を高めることを先ず眼目におき、生命の尊さを自覚して、積極的に生き抜いていくことを強調しました。沖縄の固有の文化を重んじて、世界の文化を摂取して沖縄文化を発展させていくこと、世界の事情、とくにアメリカの事情を知らしめる。そのようなことが中心でした」<sup>(35)</sup>。そして出来上がった1年生用の教科書1ページが「アオイソラ ヒロイウミ」であった。「沖縄は、戦争で何もかも失った。目につく大きなものは、それであった。象徴的な教科書の始まりであった」<sup>(36)</sup>。ちなみに、3年生は「蔡温」、4年生は「マラッカへの船」、5年生は「ベンゲット道路」、7年生は「産業の恩人野国総官」、8年生は「首里城跡の赤木」である<sup>(37)</sup>。ガリ版刷教科書はいくつか現存しているが、ここに、貴重なガリ版刷教科書がある<sup>(38)</sup>。この教科書は、達筆な漢字かな混じりの文体で、一部は鉛筆書きとなっており、何名かが分担して編集したことがわかる。残念なことに、43～77頁の部分しか残っておらず、いつ発行されたか、何年生用なのか知れないが、高学年用のものであったことは推測できる。知るかぎりでの内容は、「十三 ひざ栗毛」・「十四 名護浦の海豚捕り」・「十五 アメリカだより サンフランシスコから」・「十六 星の話」・「十七 久田船長」・「十八 もくせいの花」(詩一筆者注)・「十九 佛法僧」・「雀の子」(一茶の俳句一筆者注)、である。ここでは、「名護浦の海豚捕り」を取り上げてみることにする。

「海豚だ。海豚だ。」

威勢のよい叫び聲が、野に山に村々に傳はる。鍬を持つ者、鉈を負う者、もりを握る者、老いも若きも、男も女も名護の濱邊へと急ぐ。砂濱は忽ち人の黒山を築く。鎮守の森では豊漁の祈りを捧げてゐる。

嘉津宇岳が青空高くそびえ白い砂濱がはてしなくつゞいてゐる。名護の浦曲はのどかになきわたつてゐる。遥か沖にかすかにうごめいてゐるものが見える。岸邊では多くの群集と共に村の幹部が旗を携へて沖に見入つてゐる。

やがて各部落からは傳馬がえつさえつさと掛聲勇しく運ばれて来る。傳馬の乗組員は數名で皆海の覇者を以て自負する元氣者ばかりだ。

數知れない海豚の大集團は油を流したやうな静かな海を大海豚を先頭に浮きつ沈みつ潮を吹きながら砂濱へ向ふ。その後を小石を投げつゝ傳馬がさそうて行く。その間は一問とは離れない。海豚と傳馬との呼吸がぴつたりあつてゐる。海豚は名護の浦曲の緑を自分等の安住所とでも思つたのか、船のさそふまゝに岸邊に進んでゆく。やがてあさせに進みかゝるや方向を沖に轉じようとして海豚の群はあわて出す。間髪をい

れず「突込め」の合圖に岸邊の大旗を振る。各傳馬は思ひ思ひのもりを投げつける。もりは大綱をひいて體內深く喰い込んで動かない。海（ここから鉛筆書き一筆者注）豚は白波を立てながらものすごくあばれまはる。船も海中深くひきづりこまれさうた。二番もり三番もりと續けざまにつきさゝれる、海豚は血しぶきをはきながらいよくのたうちまはる。すがざす鉦を振りかさして海豚に馬乗りして、そののどもとをえくりとる。見るく名護灣は血の海となる。

岸に待ち受けた人々は、小山のような大きな海豚をめいくの村へ持ち帰つて行く。

この文章は、沖縄の人たちが古から営々と受け継いできた伝統を守り、さらに未来へ向かって雄々しく飛び立っていかうとする意気込みに溢れた内容となっており、読む人をして感動させずにはおかない。

#### 4 「ウルマ新報」を発行させたことの意味

沖縄戦の中で、発刊された新聞が「ウルマ新報」である。

発行の経緯は、創刊者であった島清によれば、こうである<sup>(39)</sup>。1945年7月初旬頃、石川収容所に収容されていた島のもとに、米海軍大尉が訪ねて来た。「この混乱状態で住民はニュースを渴望していると思う。新聞を発行してくれる人はあるまいかと、市長と小橋川所長に問うたところ、君意外に適任者はないといわれて、相談に来た。軍の援助で新聞を発行してくれる気はないか」<sup>(40)</sup>、という。

ここで、収容されるまでの島の経歴に触れておく<sup>(41)</sup>。島は、1908年糸満町に生まれ、尋常高等小学校1年を中退して沖縄を去る。法政大学法文学部英法科卒業後、東京で社会主義政党内閣に入閣、実践活動に従事するが、満州事変・日中戦争と、拡大する戦局による東京での戦争の難を避けるため、1938年に沖縄へ引揚げる。沖縄では、社会大衆党那覇支部を結成して社会主義勢力を結集、翌39年には県政社会浄化連盟を結成し、沖縄政界にデビューするも、第二次大戦の勃発によって弾圧も厳しくなり、政治的な発言は封じられるようになる。米軍が沖縄本島に上陸した45年4月1日の深夜、首里から中部戦線を突破して北部の山中に避難、同年7月上旬にみずから下山し、石川収容所に入った。

石川は、米軍上陸直後、沖縄本島における中心的な収容所であった。ここにいた島を米海軍大尉が、「新聞を発行して欲しい」、と訪ねて来たのである。島は、「沖縄県民の多くは、今でも日本軍逆上陸を信じ、必勝を疑っていない。これ程盲信している県民に、何時か誰かが真実を知らせる役割を果さねばなるまい。偽りない世界を紹介し、次の時代に遅れをとらせないよう、方向を示すことは、やり甲斐のある尊い仕事だとは思ふ。軍は民心安定の手段に新聞の発行を望んでいるのであろうが、私も民心の安定を欲している。その限り軍の意図は諒解できるし、その意味では新聞発行に興味がないでもない」<sup>(42)</sup>、と答え、条件として「新聞は県民のためのものとし、私の責任で発行する」・「人事、編集、運営等一切、私の権限に属するものとす」・「軍は援助だけで干渉はしない」<sup>(43)</sup>、このことを提示して了解を得、発行の準備にとりかかる。編集方針は、つぎの点に置いた<sup>(44)</sup>。

新聞を編集する私の基本方針は、真実の世界を偽りなく、ニュースとして提供するというにあった。軍の住民に対する示達事項はニュース価値も高いので掲載したが、軍の出し渋る事柄でもニュース性のあるものは求めて記事にした。併し反面、軍の提

供するニュースと雖も、価値の低いと判断したものは採択しなかった。

県民特に本島収容所内の住民の関心事は、家族を含めての親戚の安否、わが家に何時帰れる（解放）かということにあったので、その点特に意を注いだ。

社は性能の優れたオールウェーブ受信機と、四名のレシーバーを擁し、四六時中世界各地の電波を自由に受信し、それを私が收拾選択して編集した。

1945年7月26日、『ウルマ新報』創刊号が発行される<sup>(45)</sup>。創刊号の現物は、これまで見つけておらず、幻の創刊号といわれていたが、2007年11月24日現在時点で沖縄県コレクター友の会副会長の翁長良明が発行されたままのかたちで所蔵しているのがわかった。資料の重要性からみて、ここでは全記事を掲げ、それから検討に入ることにした。新聞名のない、わら半紙、A4サイズで、ガリ版刷表裏の2頁である<sup>(46)</sup>。45年8月1日発行の第二号から『ウルマ新報』の名が付けられた。

#### △ 米英聯合艦隊日本々土を砲撃す

独乙無条件降伏後、大西洋から解任された英国艦隊の一部と、米国太平洋艦隊とは、去る十一日前から聯合して日本々土沿岸都市に向って艦砲射撃を加へた。

米英聯合艦隊は、十一日間に亘り日本々土近海を巡航したが、日本側からは、何等発砲するに至らなかった。

米英聯合艦隊は、北は北海道沿岸都市室蘭市内を始めとして太平洋沿岸都市並びに工業地域の砲撃を開始した。同時に日本鋳業鉄會社、輪西精鉄所及び三菱炭鋳等の軍事施設を攻撃した。

未だ米英聯合艦隊に依り艦砲射撃を加へた都市は一部発表されたのみであるが、其の発表に因ると名古屋、日立も含まれてゐる。

日本空軍・海軍及沿岸要塞砲等は何等挑戦意向を見せなかった。

本戦闘に於て聯合艦隊と協力して使用された千五百機（空母機）は日本々土上空を絶へず制圧してゐた。

#### △ 引続くB廿九の猛襲！

四十七日間に亘り連日超要塞機B廿九は四十噸の爆弾を日本軍事施設に投下した。

東京、大阪、名古屋、横浜、横須賀、福岡、京都等の軍事工業施設は殆んど爆破され、其の外平塚、桑名、沼津、大分、日立、銚子、福井、岡崎等諸都市の軍需工場及び運輸機関は消滅された。

因に銚子、福井、岡崎、日立の四都市は重要な運輸及び漁業の中心地である。

#### △ 日本工業家連の悩み

最近の米空軍の日本々土猛襲に因り日本の工業家連中は今後彼等の工場を維持するに不安を抱き、日本の全工業を満州に移動せしめむと計劃して居る。併し「米空軍は日本々土とアジア大陸との連絡を妨害し、其の移動を極めて困難ならしめてゐる」と東京のラチオ放送は計劃の困難性を傳へてゐる。

#### △ 世界の動き 自七月十五日 至七月廿五日

##### 一、印度の政情騒然

印度自治制改革の爲め、ワーブエル子爵に依つて提案されてゐたイギリス側の案は印度側の内紛の爲めに破壊されるに至つた。該案に依れば軍事外交等は総督及び軍司令官に把握せしめ、内政的には印度人の自治を認めようとするにあつた。

併しそれに対する印度側の歩調全く乱れ会議派は軍事外交等を含む全面的独立を要求しモスラム派は宗教別、人種別独立をみ、土侯側は依然としてイギリスの保護を喜び、三派三様のテイ立状態で意見の一致をみるに至ってゐない。

## 二、ボルネオ戦線

濠軍はボルネオに於て日本軍を五十軒に互って撃退した。現在本島の重要油田は全部濠軍に奪還された。

## 三、千島列島

十四日アルーシャン基地より米機は更に千島を爆撃し沿岸施設を爆破した海防艦二隻を撃沈した。

## 四、重慶

重慶放送に依れば目下支那軍の三縦隊は広西省、貴林省に向つて約二十軒の地点を進撃しつつある。尚ほ江西省、懸市と同市飛行場は支那軍の手に再び奪還したと發表してゐる。

重慶総司令部の發表に依れば支那の一軍は印度支那国境を越えて沿岸都市モンリイを占領し、日本軍と東南アジアにある日本部隊との連絡線を切断したと傳へてゐる。

蒋介石將軍は米國新聞記者に向つて、「適當な武装と補給品を受ければ支那軍は米空軍と共に大陸に存在する日本軍を撃退し得る」と語つた。

モスコウに於いてスターリン首相と協議中であつた支那首相宗子文は協議を終へて重慶に歸つた。

宗首相は「日本との戦争は一年以内に終結する」と語つた。

## 五、フランス

フランスは日本に対し宣戦を布告した。佛軍大将ジャック、レ、クレルクは対遠征軍に司令官に任命された。

## 六、イタリヤ

元日本の同盟國たるイタリヤは日本に対して宣戦を布告した。

## 七、独乙 ポツダム

ツルーマン大統領はポツダムに於いてチャーチル英首相とスターリンソ聯首相と共に欧州の将来に就いて協議してゐる。

ツルーマン氏は米軍に向つて左の如く演説した。

「我々は征服を本位として今次戦争を闘つてゐるのではない。領土的にも經濟的にも何等其等の欲求に惹かれて戦つてゐるのではない。我々は人類の平和、幸福、隆盛の爲めに戦つてゐるのである」

記事から知れるように、内容は、日本および海外での戦局（誤りもみられるが一筆者注）がすべてで、収容されている住民が最も知りたい沖縄県内の状況については、記載されてない。第二号から少しずつ沖縄の状況も載せられるようになる。見出しをみると、第二号（1945年8月1日）：『食糧増産協議會開る』、第四号（1945年8月15日）：『本部より皆様へお知らせ』として厚生部（救済部）・廃油活用部・軍医部・農業部よりのお知らせ、第五号（1945年8月22日）：『暁だ!! 沖縄再出発 舵手十五名諮詢委員確定』、などである。

では、どうして米軍政府は、収容所内で「ウルマ新報」を発行させたのか。この点について島は「軍側からみれば、民心安定に顕著な事績を残し、占領政策に偉大な貢献をなしたと

思ったであろう」<sup>(47)</sup>と書き、大田昌秀は「米軍政府は、行政組織面が整備されるにつれて、軍政をより円滑に実施していくため新聞の発行を思い立ち、それをみずからの機関紙として使用する計画を立てました。……敗戦の混乱で事態の掌握ができなくなっていた地元住民にニュースを知らせ、人心を安定させるねらいももっていました」<sup>(48)</sup>と述べ、新崎盛暉は「多くの人びとが収容所で茫然自失の状態にあったとはいえ、なお日本の必勝を信じている人びとも少なくなかったであろう当時の状況を考えれば、米軍政府が軍政の円滑な実施のために、日本語の広報紙を必要としていたことは明らかであった」<sup>(49)</sup>とする。三者とも、民心の安定によって軍政の円滑な運営をはかるための新聞発行だという。そして「ウルマ新報」の後身である琉球新報社は、「日本の敗戦の現実を報道し、無用の犠牲者を出さぬための、いわば、宣撫のための報道機関であったのである」<sup>(50)</sup>、と書く。

米軍政府の意図が最も象徴的にあらわれていると思われる「第二号」の記事をみることにより、新聞を発行させた意味を知りたい。記事は、日本の戦局の悪化による敗戦の必至と連合軍の優勢を知らせることにほぼ90パーセントが割かれ、残りの10パーセントが沖縄にかかわるものである。この10パーセントの中味をみる。住民にとって最も関心が高かった家族のことについては、7月21日に米軍政府代表と各収容所からの住民代表が集まり、「家族再会の促進」「家族再会の方法は住民団体を通じて行ふ」「家族調査の促進」「家族の移動は所轄軍政府の許可を受け巡察付添へに依る」「許可証は市長又は役員と雖も口を下付することを得ず」「住居の整備促進家屋の建設を急ぎ住民の協力要請 海軍設営隊家屋建築進行は住民の移動に伴なざるを以て新家屋に移りたる後は即時テントを軍政府に返送すること」、が協議された、と報告する。

住民の生活上、必要なものは、つぎのように載せる。

農業については、「口中本島民は北部に居住する必要農業問題は最も重要であるしか米本国の物量にも限度があり、人造肥料は米国内に於ても入手困難であるが、輸入を図って増産に援助したい。種子、農具等の不足は輸入する。現在保有する種子類は白菜、冬瓜、玉ねぎ、トマト、豆、南瓜、茄子、人参、大根等である。人糞肥料の使用も蚊蠅の発生防止策を講じ、衛生的処置を施したる後之を許可す。堆肥厩肥の増産には特に意を用ひ、新鮮なる野菜の供給に努めて貰ひたい」。

「豚の飼育は一定個所に於てなさしめ、馬、山羊、鶏等は軍政府並に農業部長の許可を得て飼育せしむ。獣類の屠殺は、屠殺場以外に於ては之をなさざること」。

漁業については、「漁業に要する網其他の用具は保持し、許可あり次第実施したい。尚漁具の不足分は製作し、猶足りざる場合は輸入す」。

家族との再会を第一に置く中で、農業、畜産、漁業の復興に意を注ぐとしている。そして次のような質疑応答の要旨をも載せる。

- A. 耕地に家屋を建てざるやう配慮を乞ふ
- B. 設営隊、軍政府協同して充分に其の方法を講ずる
- A. 人口移動の受入地に対して移動前に其の員数を通知して頂きたい
- B. 正確の数字を持ち合せて居らぬ故即答しかねる 後日回答せしむ
- A. 惣慶銀原は水が不足勝なる故適当なる処置を講じて頂きたい
- B. 専門家に調査せしめ然るべく善処せむ
- A. 農具の入手方法に配慮ありたし

- B. 各キャンプの保有数を報せ、それにより南部より集めたるものを配給し、猶足りざる場合は善処を講ず
- A. キャンプ付近の耕作敵地を作業員に対し耕作せしめられたし
- B. 各キャンプ所轄軍政府の決定する案件なるも、併し憲兵が保護を加へるに充分なる場合は、地方事情に応じて善処せむ

戦局に関する90パーセントの記事、沖縄に関するこの10パーセントの記事から、何を讀み取るか。米軍政府は、日本軍の捕虜に対しては、日本の敗戦は必至であるとの「目に見えない情報」を与え、住民に対しては、衣食住の中の食と住を保障するとの「目に見える情報」を与える。このことは、米軍こそ沖縄の統治者であるとするこの表明にほかならない。このことこそが、「ウルマ新報」を発行させた意味である。

以後、米軍政府は、新聞などの情報網をも通して、沖縄を支配下に置く。

## 5 三味線と踊りの「力」

住民にとって捕虜収容所での殺伐とした生活に潤いを与えたのが、三味線と踊りであった。山田有昂は、収容所と三味線についてこう語る<sup>(51)</sup>。

敗戦で社会目標を失うと、秩序も乱れてくるのは当然だ。心が傷つき虚脱状態に陥ることはとにかくヤケのヤンパチで、人はいつ集団心理で何をしでかすか分からない。収容所はたえずその危機をはらんでいた。そこで、皆に相談したら、真っ先に返ってきたのは三線をつくろう、ということであった。……面白いことに、捕虜の中には、大工さん出身とか、技工の達者な人もいて、三線の製作がはじまった。窮すれば通ず、というか、無より有を生ずで、空き缶を胴にして、落下傘の紐を弦に、そして折りたたみ式ベッドの木をサオにして細工を試みたのができあがっていた。

カンカラ・サンシン（空缶三絃）よって歌いだされたのが金城守堅作詞の「PW 無情」・「屋嘉節」・「敗戦数え歌」である。とくに心を慰めてくれたのが「屋嘉節」であった<sup>(52)</sup>。

- 1) なちかちや沖繩 戦場になやい 世間御万人ぬ 袖ゆ濡らち  
(悲しいよ沖繩 戦場となり 多くのウチナンチュの袖を涙で濡らす)
- 2) 勝ち戦願てい 恩納山登てい 御万人とう共に 戦しぬじ  
(戦いの勝利を願い 恩納山に隠れての生活 皆で助け合い共に戦を凌いだ)
- 3) 恩納山下りてい 伊芸村過ぎてい 今や屋嘉村に ゆるでい 泣ちゆさ  
(終戦の知らせを聞き 恩納山を下り 伊芸村も過ぎて 連れていかれたのは屋嘉の捕虜収容所)
- 4) 哀り屋嘉村ぬ 闇ぬ夜ぬ鴉 親うらん我身ぬ 泣かんうちゆみ  
(哀れな屋嘉村の闇夜の鴉 親がいない私は泣かずにはおられない)
- 5) 無蔵や石川村 萱ぶちぬ長屋 我んや屋嘉村ぬ 砂地枕  
(愛しいあなたは石川収容所の茅葺の長屋で寝るが、私は屋嘉収容所で砂地を枕にして寝る)
- 6) 心いさみゆる 四本入り煙草 淋しさや月日 流ちいちゆさ  
(心を慰めてくれる 四本入りの煙草 淋しいことは月日が流してくれる)

この「屋嘉節」について、ジャーナリストの新川明は「沖縄戦で共通の体験をし、共通の思いを抱く島びとたちのあいだにまたたくまに拡がり、今日に至るまで歌いつがれている。戦禍で荒れ果てたふるさとを思い、別れ別れになった肉親の安否を気づかい、みじめなおの

れの境遇をうたう敗戦哀歌であり、戦後“島うた”の傑作の一つである」<sup>(53)</sup>、との評価を与える。沖縄諮詢会委員であった仲宗根源和は、「沖縄人と三味線は引離すことの出来ない結合物である。宿命の島の人々の心の奥は三すじの糸に托して哀々切々として天地の神への哀願となり祈祷となる」<sup>(54)</sup>、と沖縄人にとって三味線の音がもつ「力」を感動的なまでに強調する。

1945年6月、のちに人間国宝になった島袋光裕は長男夫婦、次男夫婦、三女、四女を沖縄戦で失い、呆然とした日々を捕虜収容所ですごしていた。その頃米軍政府の文化部長ハンナ少佐から呼び出され、「芸能人のいどころを教えてください。芸能人が集まれば芸能団を組織して沖縄独特の芝居を各地でうってみたい」という。芸能人を集めるのは至難であったが、一応の顔ぶれが揃った。皆を前にしてハンナは、こう問いかける。「沖縄は激しい戦いのためにすべてが灰に帰ってしまった。おそらく完全に残っているのは、皆さんが持っている芸能だけであろう。沖縄の人びとも今は虚脱状態にあるが、一日も早く心の糧を与えなければならない。同時に、米軍にも沖縄を認識させる必要がある。それには芸能を復興させて沖縄の人にも米軍にも見せてやるのが一番の早道だ」。舞台衣装や化粧品集め、稽古場を作るには、難渋をきわめたが、45年8月20日には「沖縄芸能連盟」が発足する。12月には石川市の城前小学校の校庭で第1回の公演会を催した。舞台は、校庭にドラム缶をいくつか置き、その上に板を敷いて柱を立て、背景は幕を張っただけのものであった。出し物は、組踊「花売の縁」や「老人踊り」「八重瀬の道行」などである。とくに「花売の縁」は、妻子を捨て故郷を離れて沖縄本島北部の塩屋にこもっている森川の子、たずねて旅から旅へと苦労を重ねていく乙樽母子の境遇に、満場の観客は感激と同情の涙を流した。みんな戦火をくぐって九死に一生を得た人たちである。私たちが身の引きしめる思いで、一生懸命に演じた<sup>(55)</sup>。

舞台を見た文学者の外間守善は、沖縄の三味線と踊りのもつ「力」を実感した一人であった<sup>(56)</sup>。

戦後最初の芸能大会が石川の城前小学校の校庭で行われたのはその年の十二月二十五日のことである。……当日は多くの人々が集まり、会場で演者も観衆も一体となって郷土芸能に酔いしれた。……砲弾の降ってこない南島の夜空に吸われていく三線の音や人々の歓声に改めて平和の尊さを実感した夜であった。

石川の城前小学校で行なわれた芸能大会が人々の心にどれほどの活力と潤いを与えたか、想像に難くない。演目のひとつ「森川の子」に戦禍で散り散りになった家族の姿を重ねあわせ会場からは嗚咽が洩れていた。嗚咽は共感であり、郷愁であった。枯れ枯れの大地に浸みとおる水のように、飢えた心の奥深くまで浸み込んでくる豊かなものを私自身も感じていた。後年、私は私の学問で「うりずん」という語を掘り出すが、歴史的にさまざまな苦悩を体験してきた沖縄を甦らせてきた力を私も身を以て知った出来事であった。

国文学者で民俗学者でもあった折口信夫は、1946年8月29日・30日・31日の3回にわたって『時事新報』に「沖縄を想ふ」と題した一文を載せている。この中で、折口は沖縄戦で失ってしまった沖縄の芸能について「風のたよりに聞けば、今度の壊滅で、三味線を弾く紳士たちは、あら方戦死したらしい。組踊りを演出することの出来る先輩役者も死に絶えた。辛うじて其部分々々を習ひ覚えた中年の俳優たちも、流離し尽したらしい。国頭の山の緋桜のやうに、寂しいけれど、ぼつかりとのどかに匂うて居た沖縄の音楽・舞踊・演劇を総合した組

踊りも、今は再見られぬ夢と消えてしまつたのであろう。あゝ蛇皮線の糸の途絶え一。そのやうに思ひがけなく、ぷつぷつと一とぎれたやまと・沖縄の民族の縁の糸一。」<sup>(57)</sup>、と憂えた。だが、「壊滅」したかにみえた沖縄の芸能は、不死鳥の如く蘇る。それは収容所の中から生まれた。蘇る沖縄の芸能の状況を、沖縄芸能史研究家の矢野輝雄は、つぎのように活写する。「家を失い、親兄弟に別れて、為す術もなく毎日を送る人たちが、生きる喜びを託したのは歌三味線であり、踊りであった。……十二月には城前小学校校庭で初めて大掛かりな芸能大会を催した。組踊り『花売の縁』が上演され、母と子が父を探して流浪し、首尾よく巡り合い、手に手を取って首里へ帰るといふ物語りに、観衆は涙に頬を濡らし、すすり泣きは会場に波のように起こつたといふ。『浜千鳥』『四つ竹』など、見慣れた踊りであるにもかかわらず、そのいずれにも心から感動し、手の痛くなるほど拍手を送つた。まさに芸能を通じて生きる喜びを確認したのである」<sup>(58)</sup>。沖縄の三味線と踊りには、沖縄の人たちを生き返させる「力」が秘められているのである。

## 6 蘇る壺屋と泡盛

1944年10月10日、米軍機が那覇市を襲つた。「10・10」空襲である。廃墟と化した那覇市の中で、壺屋の家屋や焼成窯が奇跡的に焼け残り、原材料も豊富に残っていた。かつて陶芸家の濱田庄司が、「壺屋（沖縄）へ通う度に入口でいつも見とれるのは、左手の丘に添って低く延びた南蛮焼の窯屋根である。素焼の赤瓦と、屋根棟を押さえた白い漆喰と、積み重ねた太い石の柱とが、逞ましい榕樹の間を長々と見え隠れしている。私が今まで見た窯場の中では、石見の湯泉津のものと壺屋のものが一番立派だと思ふ」<sup>(59)</sup>、と評した壺屋が、空爆の嵐が吹きまくつた中で生き延びていたのである。

45年9月中旬、沖縄諮詢会商工部長の安谷屋正量は、米軍政府将校隊長のヘンリー・H・ローレンスと壺屋を調査する。壺屋は茫々たる雑草地になっていたが、雑草をかき分けながら入っていくと、家屋も窯も一寸手を加えれば使える状態で、薪も陶土もあった。安谷屋はローレンスに、「このように、業者さえ移住すれば直ぐ生産出来る状態にあるのだから、一日も早く陶器業者が移住できるように取計ってもらいたい」<sup>(60)</sup>、と頼み込む。ローレンスは快く引き受けたものの、収容所生活が続く中で、米軍政府の許可が下りるまでには難渋した。米軍政府と諮詢会商工部のやりとりは、当時の壺屋が置かれている状況を物語っていて興味深い<sup>(61)</sup>。

**米軍政府：**現地に業者を移住させることは出来ないが、業者従業員を宜野湾村野嵩に集結し、そこから車で壺屋に通わせるなら差支えない。

**商工部：**こちらでは陶土で製型した素地は屋外で自然乾燥させるので、その間に雨でも降ると、夜中でも起きて屋内に運び込まねばならない。また乾いたものを窯に入れて焼成を始めると、焼き上げるまで数日、徹夜を続けなければならないから通勤では仕事にならない。従業員だけでも是非移住させてもらいたい。

**米軍政府：**男子従業員だけなら移住させてもよいが、何人いるか。

**商工部：**三十名くらいである。

**米軍政府：**従業員が越境しないと保証出来るなら、移住させてもよいが、どうだ。

**商工部**：従業員が薪を拾ったり野菜作りなどして生活の出来るだけの地域を開放するなら、越境しないことを保証しましょう。

**米軍政府**：どのくらいの地域が必要か。

**商工部**：壺屋、松尾、開南、真和志の四点を結ぶ道路で囲む地域内でよい。

**米軍政府**：では周囲の軍物資を撤去し、憲兵を駐屯させて保護するから、その後に移住せよ。

このような交渉を経て、壺屋に陶工が入る。この時の状況をのちに人間国宝となる金城次郎は、つぎのように語る<sup>(62)</sup>。「石川の収容所で、アメリカ軍から壺屋の人たちは焼き物を作るので一足先に壺屋に帰すと告げられた。終戦の年一九四五年（昭和二十年）十月の半ばごろ、壺屋の人たち約三十人ぐらいに、付随するものとして衛生班とか食糧班とか警察や役所関係なども一緒に、先発隊として壺屋に入った。戦争を境にして約7ヵ月ぶりの帰郷である。まだ敗戦を知らずに山の中を逃げ回っている人も多数いたところで、那覇の街はすっかり焼けて、見渡す限り草原だった。幸い壺屋には焼け残った家屋があり、そこへ分宿し、仕事に取りかかった」。また陶工の島常賀は、こう述懐する<sup>(63)</sup>。「昭和二十年の十月中旬、壺屋の人たちを主軸にして、建築班や衛生班や食糧班なども一緒に、壺屋入りの許可がおりた。……トラック1台に最初は十数人乗り、石川で壺屋出身の人たちがまた十数人加わって、四十人余りが壺屋入りした。後日、大城鎌吉一派の建築作業班が三十人余り山原（沖縄本島北部―筆者注）から入ってきた。私たちは焼跡の整理、道作り、焼け残った家屋の修理などにとりかかった。壺屋の一部の人たちは、こわれた窯の修理から始めた。そして間もなく、小橋川仁王さんの窯を中心に、マカイとか皿とか湯飲みなどの日用雑器の製作にとりかかり、壺屋の窯から煙がたちのぼった。それが那覇復興の合図といえるのだった」。当時、設営課長であった大城鎌吉は、壺屋入りと壺屋での仕事の内容をつぎのように回想する<sup>(64)</sup>。1945年11月10日、石川収容地区から区長の城間康昌らと那覇をみて、その日は引き返した。地区隊長のプランナーと産業隊長のローレンスからは「早く国頭（沖縄本島北部―筆者注）から人民を連れてきて建設しろ」との命令が出ていた。その日は石川に泊まり、翌日は国頭に行き、11月15日にトラックで40人余りが壺屋入りした。またその他に瓦職人、大工などの技術者100人余を連れてきた。設営隊の主な仕事は、こわれかかった家の修理であったが、毎日、トラック2～3台分の建築用資材が入るので、家の修理、住民を受け入れる家の新築に忙しい日々であった。

焼かれた日用食器類は、作るそばから糸満地区の役所がトラックで取りに来て、住民たちに無償で配った。無償配給時代であったので、陶工たちには手間賃がなかった。そこで1000個窯入れすると100個ほどをワタクシグー（へそくり）にし、地方あたりの食器類が不足しているところとタバコやジャムなどと交換した。タバコは食糧と交換し、ジャムで酒を作った<sup>(65)</sup>。やがて壺屋には、陶工の家族やほかの人たちが移り住むようになり、活気づく。まさしく壺屋は、「戦災によって日用食器類を喪失した住民の需要をみたすべく全能力をあげて生産増強につとめ類例のないほどの活況を呈していた」<sup>(66)</sup>、のであった。

民芸運動家の柳宗悦は、53年8月15日発行の『月刊たくみ No.8』に「壺屋の新作」を寄稿、焼け残った壺屋と蘇った壺屋に対し、驚きと感激を込めてつぎのように書き記す。「有難いことに壺屋は助つた。沖縄唯一の窯場であるだけ、之が戦禍から免れたのは、島にとってどんなに幸せな事であるか知れぬ。首里及那覇は見る影もない有様であるが、その中間にあるこの窯場ばかりは奇跡的に助つた。戦後すぐ島の需要に応じて食器を作つたと云ふ

が、……その後進駐兵向きの、やくざな品物を作ることを余儀なくされて、見る者を慨嘆させたと云ふ……先日倉敷の民芸館で沢山買入れた品を見て、全く驚いた。苛烈な戦争で多くの陶工を失ひ長く仕事を休み、つまらぬ焼物を作つて漸く経済をつないでゐたにも拘らず、大した本来の面目を輝き出させた。或品では旧のものより更に優るものさへ創造してゐるではないか、誠に健在なのを見て、感嘆せざるを得なかつた。……この島はひどい戦禍を受けただけに、立ち直る為には、どうしてもその産業を再興せねばならぬ。その中で文化的に大きな意味を持つものは、その土地で生れた手仕事の他にあるまい。先ず第一に壺屋が立ち上つたのは朗報である」<sup>(67)</sup>。鉄と血の嵐が吹きまくつた沖縄戦の終結後、人びとの復興への灯火となつたのが、壺屋の窯から立ちのぼる煙であつた。

かつて醗酵学的世界的な権威であつた坂口謹一郎は、沖縄の泡盛を、こう評した。「君知るや名酒泡盛」<sup>(68)</sup>と。沖縄戦は、この「名酒泡盛」を完膚なきまでに破壊しつくす。坂口は、つぎのように書く。「戦前には『康熙もの』などといって、二百年の古酒を誇る家格の高いメーカーもあつたが、戦中に多く失われ、疎開によって助かつたものが僅かに残っているにすぎないという。惜しいことである。泡盛が日本の酒類と一番ちがう点は、長時間の貯蔵によって生ずる熟成し調和した風味を貴ぶところにある」<sup>(69)</sup>。沖縄戦によって泡盛の主生産地であつた首里の酒造所は壊滅し、泡盛は消滅したかにみえた。だが、王府時代より泡盛を造りつづけていた佐久本家の政良が蘇らせたのである。この経緯を追つてみる<sup>(70)</sup>。明治30年生まれ佐久本政良は、沖縄戦終結後の1945年12月まで、収容所を転々とする日々を送つていた。そこへ米軍政府から「サカヤーは早く泡盛をつくつて住民の渴きを癒せ」との指令が出て、立ち入り禁止であつた首里に帰る許可書を交付された。首里へ戻るとその変貌ぶりは想像を絶していた。「生まれ落ちるとすぐにそこで育つた首里で、四〇年も五〇年も住みなれた土地のはずなのに、どこがどこやらまるで見当がつかない様子でした。自家の泡盛酒造所がどこなのか、手がかりになるものが何一つないのです。城跡もすっかり姿をかえていました。それほどまでに戦禍を被つて、道路や起伏に富んだ丘や緑の木立までが、ただ一面に白っちゃけた焼野原に變つていたのですから」。やつと掘り当てたのは、修理すれば使える蒸留器のみであつた。米軍政府からは、早く泡盛をつくれとの命令が出る。原料は、米軍の廃棄処分にした米、砂糖、メリケン粉、チョコレートなどで、それで泡盛をつくれという。ドラム缶に米や砂糖をぶち込んで醪をつくり、泡盛を製造することにした。だが、大事なことに気づいた。「何ということだ。いくら原料の穀類や澱粉質や糖分がそろつても、かんじんの麴がなければどうしようもないではないか。泡盛は黒麴菌がなければならぬのに」。だが、黒麴菌は、奇跡的に発見された。この時の状況を稲垣真美は「生きていた黒麴菌一廃墟に蘇つた泡盛」の中で、劇的なまでに活写している<sup>(71)</sup>。

……一晩中考えあぐねた佐久本さんは、明け方、何の名案も浮かばず、寝られぬままに天幕から起き出して、蒸留機を掘り当てた酒造場の焼跡にたたずみ、一面灰白色になつた地面にぼんやりと見入つた。

すると、その目に、灰土のなかから筵のようなものの端が燃えのこつてのぞいてるのがみえた。

「おや、ニクブクが埋まっている」と佐久本さんはつぶやいた。そう気づいたとき、ある考えがひらめいた。「ニクブク」というのは、稲藁の茎の部分だけをとり出して編んだやや厚手の一種の蓆のようなものだ。沖縄ではとくに泡盛の麴米をつくる場合、

このニクブクを床の上に敷いて、その上に蒸米をひろげ、黒麹をまぶしてさらすようにして麴米をつくる習慣があった。ひよっとして、あのニクブクに黒麹菌が生きのこっていたら……と佐久本さんは思いついたのである。

しかし、灰燼となった土の中に埋もれていたニクブクでは、麹菌も死滅している可能性のほうが強い。いわば藁をもつかむ気持だったが、佐久本さんはドラム缶で蒸した米を箱にとると、その上に、灰土のなかから引き出した半ば朽ちたようなニクブクの灰を払ったものをかざして、できるだけいねいに、ニクブクの繊維や藁の茎にもし棲息している黒麹菌がいるなら、それを蒸米に落とすつもりでもみほぐすようにした。

それからの二四時間、佐久本さんは蒸米の箱に向かって祈るような気持であった。そして、二四時間経った翌朝、佐久本さんは蒸米の箱に近づき、くるんでおいた米袋を剥がしてみた。

どうだろう。蒸米はみごとに緑がかった黒色に一変していたではないか！

「生きていた、生きていたぞ黒麹菌が！」

あたりにだれもいなかったが、佐久本さんは思わず声をあげた。そして黒い麴米と変った蒸米に見入りながら、ポタポタと涙を流した。これで泡盛ができる、むかしと同じにつくれるという喜びの涙だった。佐久本さんはこのときほど黒麹菌というものの存在をいとおしく思ったことはなかったという。

この灰燼のなかに生き残った黒麹菌の再発見は、沖縄における泡盛の復活にもつながったのである。

泡盛の主要製造地であった首里の廃墟の中から、佐久本政良の情熱と執念によって発見された黒麹菌は、戦後復興の大きな光となった。

蘇った泡盛を造る煙と壺屋の煙は、沖縄の人たちにとって明日への希望を抱かせる煙でもあった。

注

- (1) 大城将保『沖縄戦の真実と歪曲』（高文研、2007年）231～232頁。
- (2) 外間守善『回想80年 沖縄学への道』（沖縄タイムス社、2007年）77頁。
- (3) 拙稿「米軍の沖縄上陸、占領と統治」（『琉球大学経済研究』第75号、2008年）10～15頁。
- (4) 『沖縄県史 研究叢書16 琉球列島の占領に関する報告書（原文・和訳）』（沖縄県教育委員会、2006年）45頁。
- (5) 林博史『沖縄戦と民衆』（大月書店、2001年）366～367頁。
- (6) 林博史、前掲書、367頁。
- (7) 沖縄市町村長事務局編『地方自治七周年記念誌』（沖縄市町村会、1955年）24～52頁。
- (8) 沖縄朝日新聞社編『沖縄大観』（日本通信社、1953年）161頁。
- (9) 神谷すみ子「収容所での生活」（那覇市民の戦時・戦後体験記録委員会編発行『忘れえぬ体験』1979年）128～129頁。
- (10) 沖縄市町村長事務局編『地方自治七周年記念誌』（沖縄市町村会、1955年）24～52頁。
- (11) 那覇市歴史博物館編「戦後をたどる—『アメリカ世』から『ヤマトの世』へ」（琉球新報社、2007年）8～10頁。
- (12) 『琉球新報』（1953年11月13日付）。
- (13) 同前。
- (14) 宜野座村誌編集委員会編『宜野座村誌 第二巻 資料編 I 移民・開墾・戦争体験』（宜野座村役場、1987年）553頁。
- (15) 『沖縄タイムス』（2008年3月16日付）。
- (16) 「一枚の写真 戦後孤児院物語」（『沖縄タイムス』（2005年10月30日～11月4日付、担当：社会部・謝花直美）。
- (17) 稲福マサ「孤児と過ごした日々」（青春を語る会編『沖縄戦の全女子学徒隊…次世代に残すもの それは平和』フォレスト、2006年）257～259頁。
- (18) 大湾近常「カマデー小の戦争体験」（「字渡具知誌『戦争編』」読谷村字渡具知公民館、1996年）209～210頁。
- (19) 「戦場の童」（『沖縄タイムス』2005年1月14日付、担当：社会部・謝花直美）。
- (20) 糸満市史編集委員会編『糸満市史 資料編7 戦時資料下巻—戦災記録・体験談—』（糸満市役所、1968年）]
- (21) 「一枚の写真 戦後孤児院物語」（『沖縄タイムス』（2005年10月31日付、担当：社会部・謝花直美）。
- (22) 幸地努『沖縄の児童福祉の歩み』（1975年）27～34頁。
- (23) 「戦場の童」（『沖縄タイムス』2005年2月5日付、担当：社会部・謝花直美）。
- (24) この『ウルマ新報』第四号は、沖縄県コレクター友の会副会長翁長良明が所蔵している。
- (25) 吉野高善・黒島直規「一九四五年戦争に於ける八重山群島のマラリアに就いて」（『石垣市史 資料編近代3 マラリア資料集成』石垣市役所、1989年、所収）717頁。
- (26) 同前、729～730頁。
- (27) 沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『沖縄県史研究叢書16 琉球列島の占領に関する報告書』（沖縄県教育委員会、2006年）50頁。
- (28) 沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『沖縄県史 資料編13 琉球列島の軍政（1945—1946） 現代2（和訳編）』（沖縄県教育委員会、2002年）86頁。
- (29) 曾根信一「石川学園の記録—まだ銃声が聞える中で始められた戦後最初の学校—」（『琉球の文化 第5号』琉球文化社、1974年）40～45頁。
- (30) 沖縄県教育委員会編発行『沖縄の戦後教育史』（1977年）6頁。

- (31) 島袋敏子「戦後の教育」（沖縄県退職教職員の会婦人部編『ぶっそうげの花ゆれて 第二集』（ドメス出版、1995年）92～93頁。
- (32) 仲宗根政善「米軍占領下の教育裏面史」（『新沖縄文学 44号』（沖縄タイムス、1980年）158頁。
- (33) 同前、158～19頁。
- (34) 同前、160頁。
- (35) 同前、162頁。
- (36) 二十五周年運動史編集委員会編『沖縄県高教組二十五周年運動史』（沖縄県高等学校障害児学校教職員組合、1996年）99頁。
- (37) 沖縄市教育委員会編発行『沖縄市学校教育百年誌』（1990年）pp.407～411頁。
- (38) この貴重なガリ版刷教科書を所蔵しているのは、沖縄県コレクター友の会副会長・翁長良明である。
- (39) 島清「ウルマ新報発刊の経緯—戦後沖縄文化史のために—」（『わが言動の書—沖縄への報告—』沖縄情報社、1970年、所収）193～206頁。
- (40) 同前、195頁。
- (41) 同前、193～195頁・256頁。
- (42) 同前、196頁。
- (43) 同前、197頁。
- (44) 同前、199～200頁。
- (45) 『ウルマ新報』創刊号の現物は、これまで見つかっておらず、幻の創刊号といわれていた。2007年11月24日現在、沖縄県コレクター友の会副会長の翁長良明が発行されたままのかたちで所蔵しており、米軍初期統治の新聞発行に關しての貴重な資料といえる。
- (46) 本稿執筆中に、あることに気づいた。それは1999年に不二出版から出された縮刷版の『うるま新報 第1巻』解説① 新崎盛暉「米軍占領下の『うるま新報』」の中にある、「創刊号はまだ見つかっていないとされているが、沖縄県立博物館所蔵—大嶺薫氏寄贈—の第二号の後半二枚・四頁は、一九九三年九月、琉球新報社を訪問したサトルスが創刊号として持参したものと一致している。断定はできないが、これが創刊号である可能性は高い」（2頁）、という指摘である。これにヒントを得て翁長良明所蔵の現物と照合したところ、『うるま新報 第1巻』の「3頁」全文と完全に一致したので、この「3頁」全文が創刊号であることは間違いない。
- (47) 島清「ウルマ新報発刊の経緯—戦後沖縄文化史のために—」（『わが言動の書—沖縄への報告—』沖縄情報社、1970年、所収）202頁。
- (48) 大田昌秀『沖縄の挑戦』（恒文社、1990年）276頁。
- (49) 新崎盛暉「米軍占領下の『うるま新報』」（『縮刷版 うるま新報 第1巻』不二出版、1999年、解説①）2頁。
- (50) 琉球新報八十年史刊行委員会編『琉球新報八十年史』（琉球新報社、1973年）28頁。  
『ウルマ新報』発刊の辞は、活版印刷となった第六号（1945年8月29日）の第1面に、こう書かれている。「新聞の発刊に努力して月余になる。各地各処に散乱する必要機具を蒐集し、整理を急ぎ漸く活字新聞を進呈出来た。本誌を以て批判を仰がう等不遜の気は毫もない。諸氏に早く国際電波を中継しようとする想が五号迄の謄写印刷、今回の発刊となった。号を重ねるにつれ、最善を尽し、全備を急ぎたいと冀ってゐる。読者諸氏の御笑読を乞ひ発刊の辞とす」
- (51) 山田有昂『私の戦記 伊江島の戦闘—屋嘉捕虜収容所』（若夏社、1977）132～133頁。
- (52) 「屋嘉節」の歌詞と訳は、當間健作「戦時・戦後の沖縄に生まれた島うたに表現されるウチナーンチュの精神性『時代—金城実 戦時戦後をうたう』からの一考察」（沖縄市立郷土博物館編集発行『あまみや 第14

- 号』2006年) 12～13頁。
- (53) 新川明「昭和期“島うた”の精神史」（『新沖縄文学 第52号』沖縄タイムス、1982年）9～10頁。
  - (54) 仲宗根源和『沖縄から琉球へ』（月刊沖縄社、1973年）36頁。
  - (55) 島袋光裕『石扇回顧録・沖縄芸能物語』（沖縄タイムス社、1982年）193～199頁。
  - (56) 外間守善『回想 沖縄学への道』（沖縄タイムス社、2007年）85頁。
  - (57) 『時事新報』（1946年8月31日付）。
  - (58) 矢野輝雄『沖縄舞踊の歴史』（築地書館、1988年）213頁。
  - (59) 濱田庄司「壺屋の仕事」（『無盡蔵』講談社文芸文庫、2000年、所収）30頁。
  - (60) 安谷屋正量『激動の時代に生きて』（角川書店、1974年）70頁。
  - (61) 同前、71～72頁。
  - (62) 金城次郎「私の戦後史」（沖縄タイムス社編発行『私の戦後史 第2集』1980年）20頁。
  - (63) 島常賀「壺屋復興の先発隊」（那覇市企画部市史編集室編発行『沖縄の慟哭 戦後・海外篇』1981年）129頁。
  - (64) 「壺屋から出発した那覇市」（那覇市企画部市史編集室編発行『沖縄の慟哭 戦後・海外篇』1981年）159頁。
  - (65) 島常賀「私の戦後史」（沖縄タイムス社編発行『私の戦後史 第6集』1982年）223～224頁。
  - (66) 沖縄市町村長事務局編『地方自治七周年記念誌』（沖縄市町村会、1955年）132頁。
  - (67) 柳宗悦「壺屋の新作」（『柳宗悦全集著作篇第15巻』（筑摩書房、1981年）468～469頁。
  - (68) 坂口謹一郎「君知るや名酒泡盛」（『世界』第129号、1970年3月）222～237頁。
  - (69) 同前、231頁。
  - (70) 以下の記述は、稲垣真美『現代焼酎考』（岩波新書、1985年）7～18頁に多くを負っている。
  - (71) 同前、18～19頁。